**痛い！「意識高い系」と後ろ指さされる人たち**

サークルやイベント活動に熱心で、有名人との交友関係や幅広い人脈をひけらかす。プロフィルを過剰に盛り込んで自己アピールに励み、周囲の評価を常に気にしている――。そんな就職活動をする学生の間で広まった「意識高い系」という言葉が、最近、ビジネスマンや主婦層でも使われ、後ろ指をさされる人がいる。一見、向上心があり、勉強熱心な振る舞いにもかかわらず、なぜ彼らは「痛い」と指摘されるのだろうか。精神科医の片田珠美氏が分析する。

## 意識高い系は自意識が高い

最近よく耳にする「意識高い系」という言葉。向上心があり、前向きで、トレンドに敏感な印象があります。しかし、実は「意識高い人」を装いながら、空回りしている人との皮肉が込められた言葉です。

　「自分はこんなにすごい」「自分は特別な人間」と思い込んでおり、他人から認められたくて仕方がないようです。その意味では「意識高い系」は「自意識高い系」とも言えるでしょう。

　そういう承認欲求を自分の中だけにとどめていれば、職場や学校などで「がんばりやさん」と好感を持たれるかもしれません。

　ただ、ここでいう「意識高い系」は、その欲求がだだ漏れになっていて、滑稽にすら見えるケースです。それは、言い換えると「傲慢」「上から目線」「独りよがり」「っ張り」という印象を周囲に与えます。

　もっとも、本人はそのことにまったく気づいていないため、「前のめり」「うっとうしい」「空気が読めない」などと煙たがれることも多いようです。

## 【１】目に余る「上昇志向」

　「あのね、政治家というのはトップリーダーなんです」

　「大きなグランドデザインを描く作業があるんです」

　高額な海外出張や政治資金の問題が次から次へ浮上し、ニュースやワイドショーで注目を集め、すっかり時の人となった東京都の舛添要一知事。記者会見のこうした発言は、人を見下していて、思い上がりが甚だしく、まさに「意識高い系」の代表格といえそうです。

　舛添知事は、東大助教授、国会議員などの華やかな経歴を持ち、「自分は特別だから多少のことは許される」という特権意識を抱いている可能性があります。

こうした発言をするのは、なにも都知事だけではありません。年齢を重ねて組織で、ある一定の役職に就いている人にも結構います。この手の言動は、上昇志向が強かった人が、それなりの地位を得たときに現れやすいようです。

## 強い自己不全感

　たとえば、メガバンクに勤める５０代の男性支店長。

　ことあるごとに「自分は東京の本店にいた」とか「本店の○○を知っている」と「本店」を引き合いに出すので、その支店の行員はみんな困っています。

　この支店長は、部下に指示を出す際に「本店ではこうだった」としきりに強調し、自分の思い通りに行員が動かないと、「本店ではそんなやり方はしない」と口癖のように繰り返します。

　また、手続きや書類の作成などでわからないことがあると、「本店の□□は、以前私の部下だったから電話して聞け」と命令。本店に電話させられる行員は閉口しています。ある行員が研修で本店に行ったところ、「おたくの支店はしょっちゅう本店に電話してくるので、本店でもすっかり評判になっている」と笑い種になっています。

　上昇志向が強い人は、努力を重ねる反面、自分の努力が報われなかったと感じると、不全感にさいなまれることが多いようです。舛添都知事が都市外交をしきりにアピールするように、「自分はもっと大きな仕事をする人間のはず」「お前らとは違う特別な人間なんだ」と思い込んでいるからです。

　この支店長は、「自分はただの支店長ではない。本店から来た支店長であり、本来はこんな小さな支店にいる人間ではない」と誇示したいのでしょう。張りぼての自分を大きく見せるために、「政治家」とか「本店」といった「虎の威」（肩書や経歴）を誇示する傾向にあります。

　「もっと出世できるはずだったのに、かなわなかった」「偉くなったのに思うようにいかない」などと不満を募らせているのでしょう。

## 【２】高すぎる「自己評価」

　意識高い系の中には、自分の職業や肩書を過大評価してしまうタイプがいます。自分はこういうポジションにいるのだから「少々のことは許される」と勘違いして暴走してしまいます。

　３０代の男性教諭。大学卒業後１０年目の同窓会に出席した際、かつての大学の同級生たちをさせました。

　彼は公立高校の教師になっていたのですが、上から目線で同級生を値踏みしたのです。

　「職場には何大学出身の人が多いの？」

　「△△さんは派遣？　大丈夫なの？　今、うちの生徒にフリーター志望の子がいて困るんだけど、△△さんはこういう日本の高校生の現状をどう思うわけ？」

　「子どもは、どこの小学校を受験させるつもり？　××小学校は名門と言われているけれど、実は頭の悪い子が多いからやめたほうがいいよ」

　彼の口から出てきたのは、こうした上から目線の発言ばかりでした。

　この男性は大学時代、ゼミでは地味で目立たない存在だったのですが、教師になって生徒や保護者から「先生」「先生」と呼ばれるようになったことで、勘違いしてしまったようです。同級生に対しても見下すような言動をとるようになってしまいました。

　このように自分の役職や肩書を過大評価して傲慢に振る舞うのはよくあることです。この男性は、自分の優位性を誇示したい欲望を大学時代は抑圧していた可能性が高く、「先生」と呼ばれる身分になった今、大学時代のを晴らすべく、ここぞとばかり「自分は偉いんだぞ」と誇示しているのかもしれません。

## 【３】好きなのは「頑張っている自分」

　「最近は平均睡眠３時間。エナジードリンク注入して今日も乗り切ります」

　「来週末はセミナーに出席。すべての出会いに感謝！」

　都内の大手保険会社に勤める２０代男性。「頑張っている自分」をアピールせずにはいられません。自慢は睡眠不足と名刺の数。

　「今週末もまた異業種交流会。結構勉強になるよ」

　「セミナーは自らのスキルを磨く大切な場。セルフブランディングに不可欠」

　ツイッターやインスタグラムなどのＳＮＳには、こんな「頑張っている自分」をアピールする言葉や写真を公開するのが日課になっています。

　ところが、残念ながら、彼自身がアピールしているほど職場で高く評価されているわけではないようです。企画書には誤字脱字のミスが目立ち、上司から注意ばかり受けています。実際は土日に出勤して、なんとか自分の仕事をこなすのが精いっぱいという状態なのです。

　にもかかわらず、ツイッターには「土日も出勤。大きなプロジェクトを任されたので全然苦じゃないよ」と書き込んでしまいます。

　「頑張っている自分」をアピールせずにはいられないのは、自分が認められていないことを薄々感じており、承認欲求が満たされていない不満を抱いているからです。

　承認欲求が満たされていれば、わざわざ自分でアピールする必要などないはずです。ですから、アピールすればするほど、周囲の目には「痛い」と映るのですが、本人はそれすら気づいておらず、空回りしてしまっています。

## 【４】おごり高ぶった「特権意識」

顧客に対して傲慢な態度を示せば結局自分が損することになるのは、ちょっと考えればわかりそうなものです。ところが、ハイブランドを扱うショップの中には、なぜか「自分はこんなに偉いんだぞ」と誇示せずにはいられない店員がいます。

　飲食店でも客に食べ方を指示して、その通りに食べない客を追い出すような店主はその典型でしょう。

　さて、某老舗百貨店のハイブランドの女性店員もその一人。

　店に並んでいる商品とイメージが少し異なるラフなファッションをした女性客に対して発した言葉に驚きました。

　「お値段、ご覧になりました？　１ケタ、お間違えではありませんか。失礼ですが、お客様にはお買い上げいただけないお値段かもしれません。思い直していただいて結構ですよ」

　周りの客にも聞こえるような声で言い放ったのです。

　そう言われた女性客は、商品を購入するつもりで試着もしていましたが、「ご忠告ありがとうございます」とだけ返して、店を出て行きました。

　そして、別の百貨店で同じブランドの商品を購入したそうです。

　この店員は、「うちの店は特別」という特権意識が強く、来店客を外見で判断して見下した態度をとってしまったのでしょう。

　特権意識の高い顧客を相手に頭を下げ、おべっかを使う日ごろの鬱憤から、逆に庶民的な相手に対して横柄な態度をとって、欲求不満を発散しているのかもしれません。

## 【５】傲慢な「金満主義」

　大金を手にしたとたん、人が変わったように傲慢になる場合があります。

　大阪市内に住む６０代の女性もその一人。

　「お店で値切らない人はバカ」

　「外車なんて、成金の乗り物」

　「清貧こそ美しい」

　以前は、こんなふうに吹聴していたのに、母親が病死し、遺産相続でな資産が舞い込んだとたん、言動ががらりと変わってしまいました。

　まず彼女は外車を買い、友人に対して「国産車しか買えない人はかわいそうね。安全性が低いもの」などと言うようになりました。

　次に、タワーマンションの高層階の部屋を２戸買い、娘夫婦に１戸を与えました。そして、娘婿に「あなたにがないからといって、娘にみじめな暮らしはさせられない。だから、私が買ってあげるわ」と言い放ったのです。

　「私、食材はデパ地下でしか買わない。スーパーだと品質がちょっとねぇ」

　「エコノミークラスでヨーロッパに行ける人って、すごい体力よね。私はビジネスクラスじゃないと無理」

　こうした言動は周囲のひんしゅくを買っていますが、本人はまったく気づいてなく、悪びれる様子もありません。

　突然、手にした大金が原因で、お金の力を過信するようになっただけでなく、お金のない人を見下すようになりました。

　高額の買い物を繰り返すのは、心の中の空虚感を埋めるためです。

　家族や友人らに高額のプレゼントをするのも、それで人間関係をつなぎとめるためです。実際は、「金の切れ目が縁の切れ目」になることが多いようです。

## 自分に酔っているだけ

　こうして見てきたように、意識高い系の共通点は、地位、肩書、資産などを誇張することよって、自らの実力を過大評価している点にあります。認められたい、注目されたいという承認欲求が強すぎるあまり、上から目線でモノを言ったり、常に自分が話題の中心になってリードしたがったりします。

　いずれの事例も、残念ながら自分の振る舞いが周囲からどう見られているかという想像力が欠如しているようです。小難しいカタカナ語を頻繁に使って、相手をけむに巻くような表現を好むのも、「他人とは違う」という思い上がった意識の表れなのでしょう。

　その結果、「実力が伴っていないくせに」「自分に酔っているだけ」「ポジティブすぎてうっとうしい」などと陰口の対象になってしまいます。そのうち、「また言っているよ」と相手にもされなくなります。

　残念なことに、こういう人を変えることはできませんので、「過去も他人も変えられない」と自分に言い聞かせて、あわれみのまなざしを向けましょう。

　そして、常に我が身を振り返る冷静なまなざしを持ち、自らの言動には気をつけたいものですね。